



氏生瓜

日本國畫

北海道

四







北海道ノ圖



瓜生氏日本國畫



北海道圖



瓜生氏日本國畫





瓜生氏日本國盡卷之四

北海道を十一國

即ち之を十州とす
 北の奥を迫門を隔てて東
 北より延びる一帯
 島十も亦百里東西を百二十

日本國盡卷之四

里小過百と持又そのあり
 東北の隅より次々小大小の
 多め敷多立并び一直線小
 連りく。處る所の林の出入
 魯西亞の領地のむさつと西と
 北とを括りの端乃迫門のあか

たを揮太州四方海より土
 地廣く内地を高山駢列
 時候極めて寒くして持れ
 山中小つたりを一年三百
 六十日雪方なき時を纒をる
 西南より海岸を。寶徳三

年とせやいふ年とし武田たけだ信廣のぶひろ松まつ
 前まへに渡わたりて城しろを搦とりへし。あ
 次つぎ少すく人ひと民たみ福住ふくぢゆうして。頼たのむ
 梨なし并ならを極きまむ。きど。其その余よわ
 居民きよじん鬆まつ跡あとより。青あお腴ゆの古ふる地ち
 を多おほくともえ。田た畑はたけを井いりて
 と

由よしえなる山やまを諸しよ嶺りやう小こ田で田た
 生なむ。堀ほりて世より出だすこと。あ
 此この地ち小こ之のより住すまひぬる。土つち
 人ひとを「アイノ」と名なを呼よびし。く。
 たゞ山やま獵りと漁りを業わざとし。知し
 ぐ此このの外ほかを一文ふ不通つう無む知ち

せんやををましく廟議盛ふて
おろくのつら人たち小命せ
て土地の開拓を以てせむお
効す我今より想ひまゝも
小まこしとあそあらざらめさ
きまは地をそほつたお

てふえのもまらるる後島
能國の松前の地方を除く
おのふるみあつて扱使の支
配ありて土地を扱を廣く
と人口は十萬と二十萬あ
まる計を其産物を今も

世より寶の國とて申さるる
軍も出でん世に寶採生
とも盡ぐ用らるる用おつ
くせぬものも其品より
概田舎より鑛属諸材木
獸の毛皮なめし皮水

鯨やから鯨鱗やう鯨小から鯨
や獺皮水豹膺膺人種
日増し數の子や老毛用
けをよる昆布とて名号
王公老人より匠夫匠婦
至るまで用おて知る物

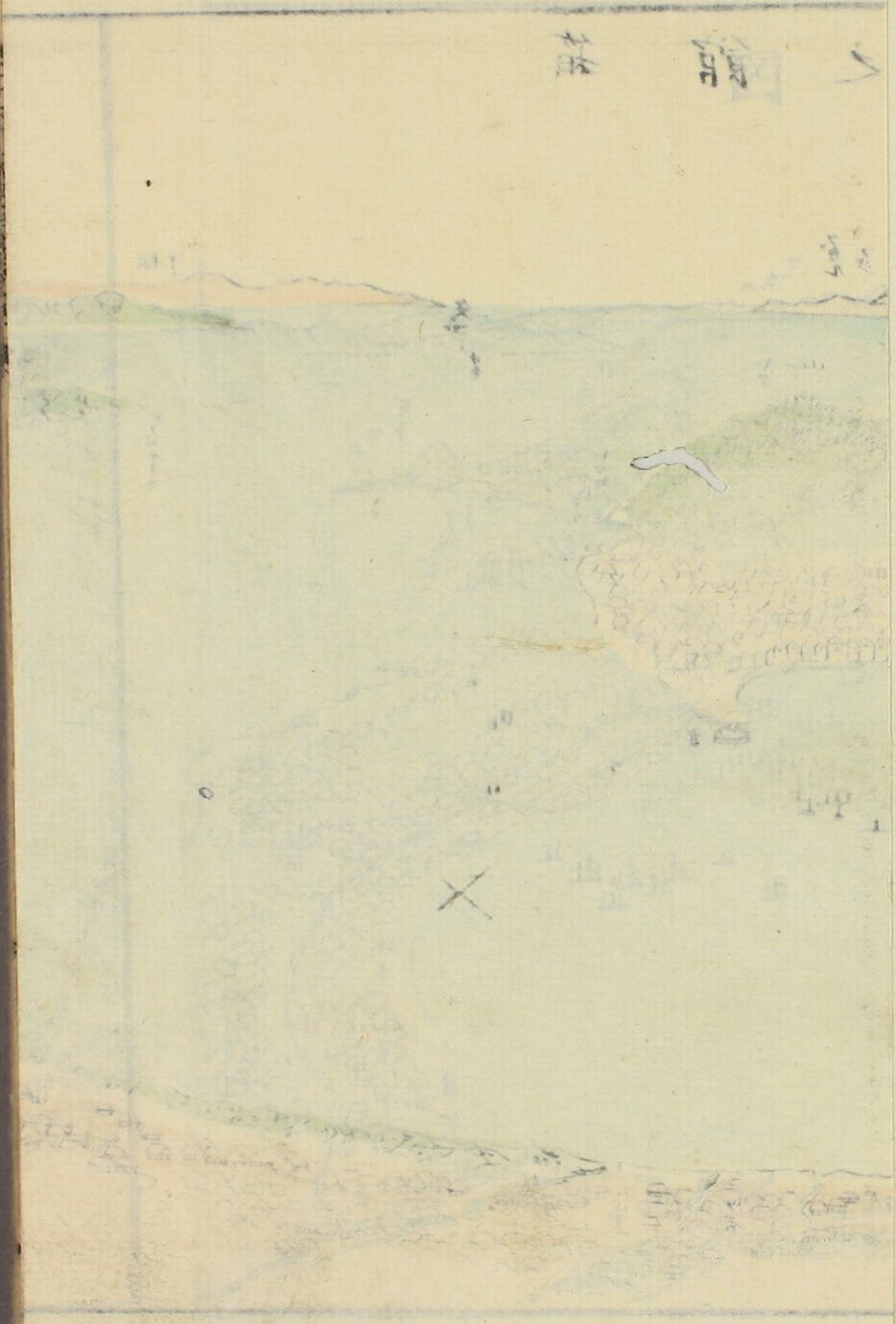
こた

其第一を後島の國形も魚
 の尾ももろふ似く二つの岬東
 西り。をき出でたる其二
 東の岬も隆奥の少能郡小
 お對し。西なる方より津積地

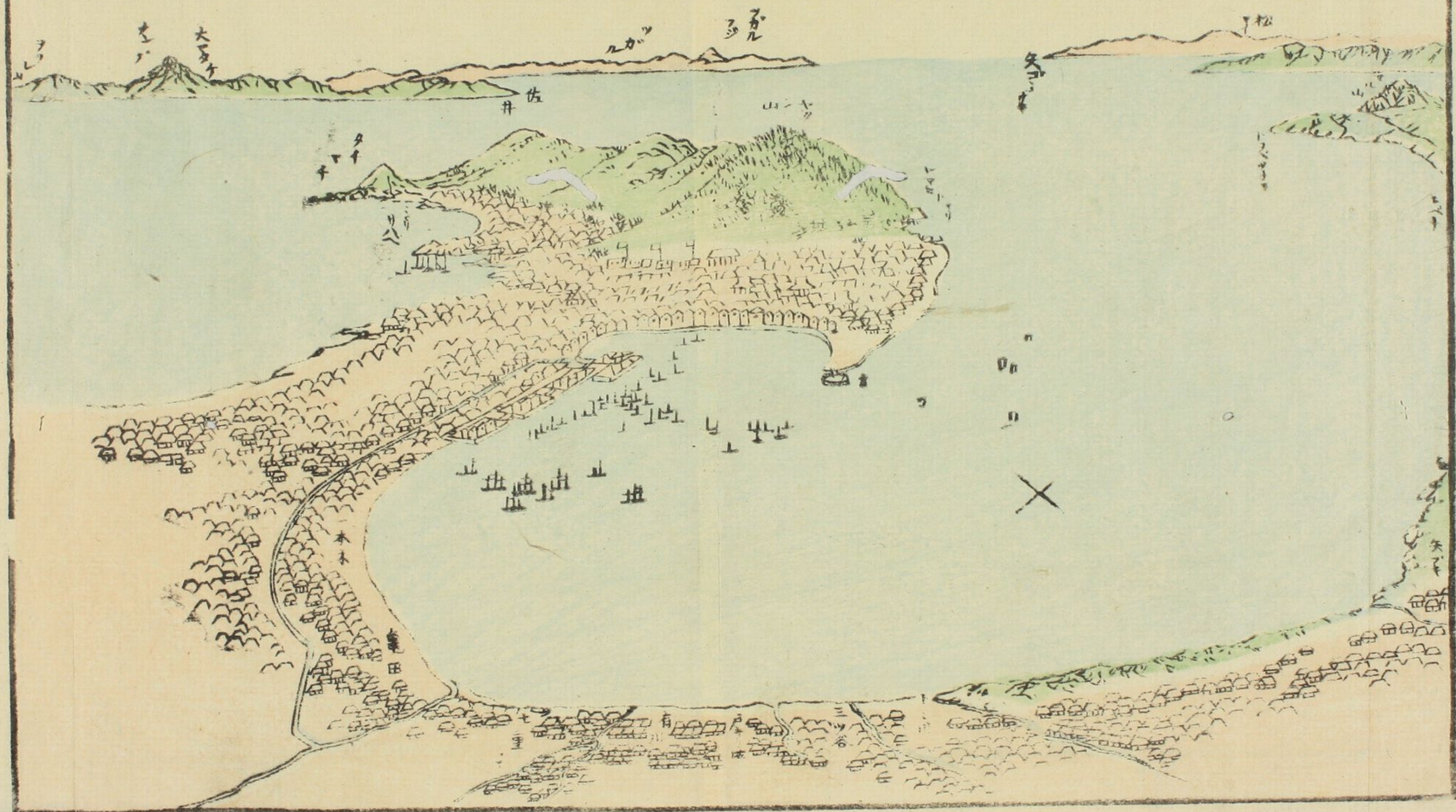
空相向き合々中々海も
 騰振と後志の二より隣を
 山多く見日岳や黒岳也佐
 山やんが茅守岳烏帽子黒
 流濁川東より高き駒が岳
 其南より湖の大沼小沼の名

日本国書卷四

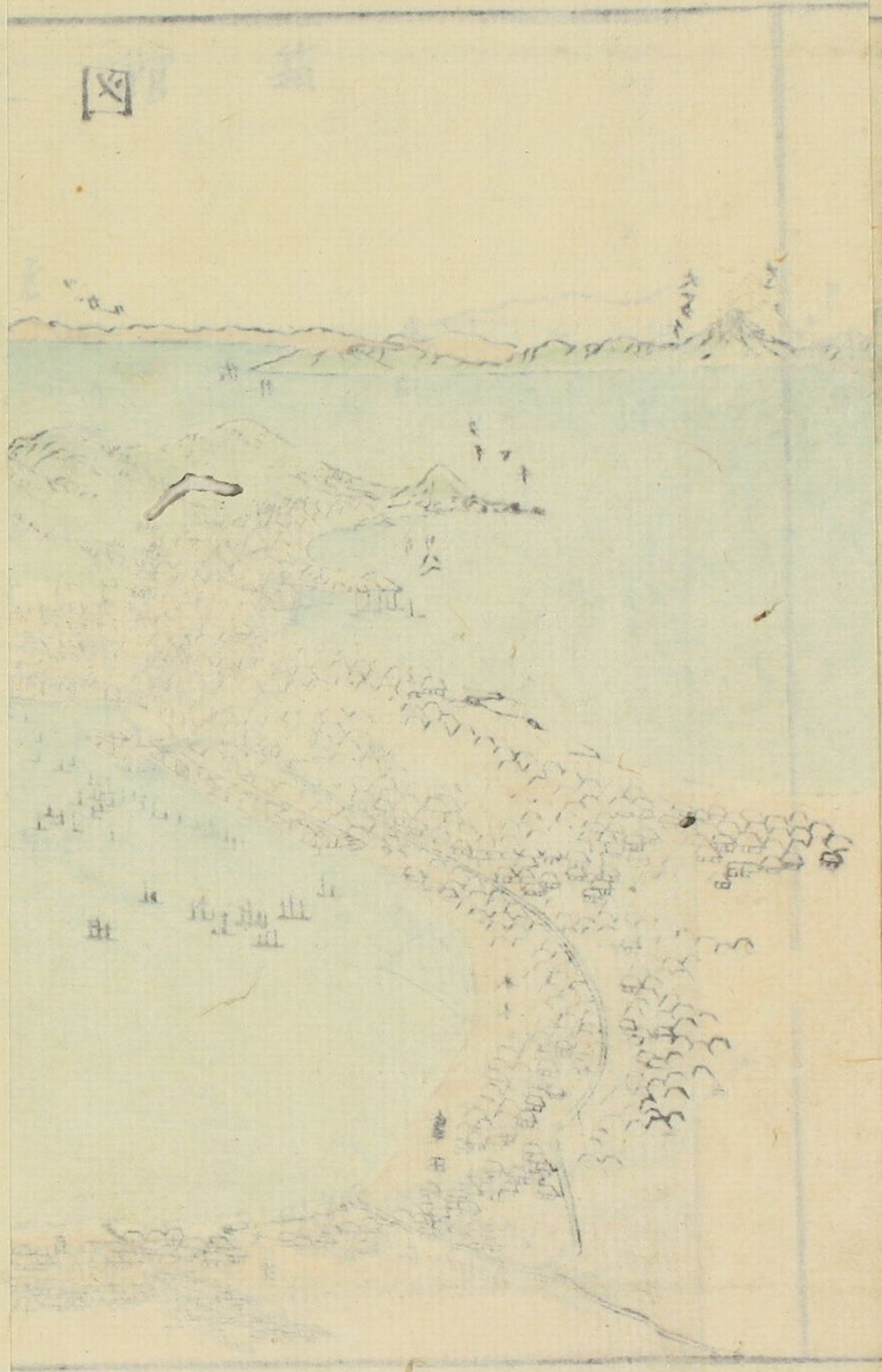
又東の其鼻ひうりより東の岬さかさに端はた
 して彼に焼山やけと一脈いやくの火くわい
 烟えん吐ふきと惠散山ゑさん惠教山ゑきょうより
 西の方きほう岸きを廻まわりて沙首さくび崎さき
 又折まりて西の半はん名なめりて大地だいち



箱館之圖



濱き、湾と成る。其港りも
 船館也。交易さるゝ人の一部會
 此處を平地とす。此處
 船の舟の第一番其先の西ふ
 る首尾岳夫より西に岬あり
 知内千軒一ゆりたひ岳七つ



八つ岳尖岳岬の先は松前
 の港を市街小きまゝく人
 民移住に権輿の地地方小
 遠く西方り。華びく立つる
 大崎と。少島の二つ乃嶋我
 北ふ廻りく鍋比利淵。

笹山こそ内愛宕山。濱手は
 帆の猶おたなく海平浮づる
 鷗島は江をた港勢を其
 小の方熊石の浦より近き中
 歌の山も後志界を川よ
 西へ安奴流川是を其地

の大河を河を浴を瀬り
水源たえく東山。又山
越えくゆくとまを冬落部
川の水より出でく夫より持の
水より傍をそ下をそは國
の東に濱より出るなる水に外

乙部見日川ありさふ石崎
上の國江良町川に南手へ
越えく冬福崎知内川をさふ
なる川に東なるはお破濟
少く有川也。東に濱より鳥
崎川落部川也野田志川

日本國書卷四

國々温泉もあまらるる也。
熊石近く小平田内見日岳
のる人自湯安奴流川の水とふ
湧く出るを女んぬる湯東
河汲濁川其外数々悉さ
きまど。北んは山々北海能。

道の内より殊更なり。シヤ七地
といひく昔より。人を移住
し地え開き早之夷類を
脱ぎしゆゑ北んが人口も自ら
余れ十國を合さても四分一
なり。及むぬ程繁殖し

たると其數も八万六千三百餘。
まゝして人氣も風俗も陸羽
よりまのするもあらず。
其第一より後志の國を南
の渡るふより東北へけ細
長く延びたる末なる石狩と

界を隣り東南を膽振の
國と脊合谷界の都て山ま
た山西水面を一体り日本
海の浪あらく差ま儀字を
岸つたてひ浦と岬の數おほく。
渡島と界の本無為の時を

過きても白別也。少くも一番の
小湾内より流る。白別の川乃
水と二つあり。其の一源は勇
拉岳。熊振の國に勇拉の川
と同じき水源あり。東に
西に流る。遠方より又北に流る。

鍋岳。此の川口より西に流る。
次より海へさし出たる岬は
天狗右田山。北に正西の海に
至る。三角形に島あり。之を
奥尻郡と名は。是より地方又
凹み平原。嶺野に別あり。

中を流る太撈川おれ水
上を右撈岳並んで流る
利別川是も頗る大河也
隣玉嶺振の解寒の岳より
堀く流き来るその川口を
赤道く行けを瀬棚のま

川や二本杉の岩を越え過
まを岬より荊場山櫻の香
北候まにほふ山の林を
白糸に流る糸もや山海の
眺望画くうくあり岬
を越えく千八瀬川堤列

川や尾平川は過平地土
 こ之を田畑を井とたより
 盧遮岳糖木林突布
 岳辨慶崎を東南へ入
 丸浦と壽都津浦油膝高
 戸解次してと当は一の繁

集の地盧遮岳突布を元
 右歌葉とお對し船
 急りよる港おとるるその
 湾中へ流き入る水は縦振
 の禮文木よわあそ集
 る珠蔭川の舟岸土地

軍を布。黒松内は谷越えて
行通ふ歩くを。やまんべ。
膽振は國の東濱人の往來
の路あり。歌葉の小磯岩
浦後を山より前を磯磯小
大河の志りごとく。小海屋の

五大河の其五目小阿たる川
遠く膽振の末より後方羊
蹄山の根を廻り四方山あり
取囲む十余里程は平原の
於うづけの地を流過し國の
界を繞り來り。数に支川

合流を磯谷に浦の北の方
温泉湧出する雷電の嶮を越
きも岩内港人家好畠土地
肥沃岩内川に水くも岩内岳
やちせ好屍岳を硫黄の金
世界又石炭を産出する好屍

深川を越え之を過て古宇郡也
積丹也美園古平余市ま
是此五郡より西に延びて出
たたる大岬積丹岳あり
岳古宇美お也古平岳是を
岬の山より恵直峠を余

市越高々峰ゆる余市
岳余市岳。水東なる水
余市。小なる余市。川の
東を平地を砂濱つたひ
婦人越り。のきも悪路高
島也。小摺郡の東なる小摺

の川。此川水。是き石狩。の
國界。さうく是とけ。一の長
さ。ち角を三十里。人口一子五
百余。
此石狩。石狩國。是き
一道の中央の内地。広がる

大正より西より海
を受て市井に余を圍む六
ヶ岳後志磐振目高の國此
三あり南あり東より十餘
少見州北より西より天塩あり
半む海をを除ち存あり

國國界多く山ありて北西
東より一休より深山幽谷
其海邊より内地より今目
前より武蔵野の原を眺む
心地して隣り磐振あり
ま。平原曠野渺茫たる中

知川ちがわ空知川そらちがわ其水源みなもと在東南
 乃國くに分わかす。樺えぞ中なかつ十勝とくしつ其
 十勝とくしつ岳だけ又また其その流ながを江え別べつ川がわ其
 の川がわ下したす。二河ふたがわより。右みぎなる
 方かたも醜津みにくづ川がわ左ひだりの方かたも夕ゆふ
 張川ちがわ醜津みにくづを南みなみ乃なり膽いぢ振ふる。

醜津みにくづ其大湖おほいづみの水みづ南みなみに國くに
 國くに成津なりづの湖うみを其その流なが通とほる
 其邊そのへより來きる。夕張川ゆふちがわの水みづ六
 羅らを丹涅たんねの湖うみ水みづ其その北きた
 水源みなもと其その當あたり。目め首うぶ乃なり膽いぢ振ふ
 の界さかい目めより。高たかく崎さかつ夕張ゆふちがわ

岳是そ水海屋中の事ニ
番目此高き山又此に次
の支川も膝振と後志
界に在る札幌岳より東海
水五番より大なる支川
遙く本川の川よりちあぐ
遠く

層々やび志川乃川一ツり
流を八分其外支川多きを
とてあげんを煩し一ツ
大いなる支川乃流れ八分
込む川をきしむ此に
此をふべし石狩川の川口

を越之く海岸西小向起
 荒き儀をより山多く阿
 羅名岳也黄人金山港も厚
 田濱益其北の方稲尾崎
 是き天塩と此界なるま
 一國內此人口もあづのり

九百十人年土地も前日
 水理よく地積も勝き
 肥沃く氣候も頻る平
 和なるま。さきも荒野も良
 田と獲るも殊る原山も

馬牛羊豕の牧所人家も
増く勢も純土此等なる

人々近きありあり

茅四小天塩の一本も
矢の根の大鷹股段隣玉
石狩紅雨竜の郡挿今

恰も大牙お接し西も海
岸磯阿らく其東北は
小入地と一直線此山界
の距へは正ま其唇股の系
なる是れ尖らる近國純
夕張十勝石狩也ちとん

あうしこれのや一連脈は
天塩岳。岳より流る川水。
少海及び五太の河の身二番
目此天塩川。其乃長きこと
百五十里内太或を劍淵の
支川ありた居つて東

の足と被此と流をそ末
鴈股の根は附之の海辺
小出つる所を谷地蘆原廣
漠を過沿おほくや
開きん天塩浦浦のおも
猿右川川を穿四の支川を

於。苦前浦の船間浦の沖
ヤキ 焼尻ヒと天帝レ於ニ處
タリ 對立リ一各周メ也リ二里リより過ス
をぐら一庵ツの川南ニ寄リ
ソモ 時ツ幌尻の岳ニより來リる留ル
モス 萌於テ此川ノ口ニより大港是レより

海岸ニより出ルる石狩界ニよ
ア りて其ノ山道ニをふリ以テ紙ニ
チ 二ノ地ニ無ク双ノの険所ニあり是レ
ミ 北ニ南ノ隅ニありて西ニあり
ア 是レ北ニ尖ルと一ニ北ニありて是レ内ニの

人口を以てしり數ふ七百
 人お地の一併のなるは、大
 塩乃川の川筋を平地殊
 更おほくし、おの川上
 のほをえ、十餘里の
 乃平原を見、通を所を

小あま是き上川や中川
 二つの郡の内おの
 才五の國を、北へや、くお
 北海よりお、心海岸を
 のま、前大國西南部
 山崎、天塩石狩十勝地

界を渡りて夫より南に羊
 腸すのりて東に釧路と
 根を以て地を接し其の
 界目を見れば南に新里
 岳を始りて羽衣別岳や
 温泉沸く其より名所は湯

輪尾岳系は岳懐内初登
 連綿法にまきそ長へ伸び
 たる脈々大岬竹の子やう
 一指を以て縦に山を
 二分して山はあなまた其
 根室岬岬の尖に知府崎

是^こき^ね松^あ室^ちと^ら此^ま界^かと^ら東^あ
 千^ち島^しを^ささ^し望^{のぞ}み^潮勢^せ
 劇^{はげ}しく^山峻^げしく^北北^{きた}を^端端^{はた}
 有^あき^薩薩^{さつ}哈^か連^{れん}海^{かい}斜^{しゃ}里^りの^岳岳^{たけ}
 よ^らの^流流^{りゅう}き^出出^でる^斜斜^{しゃ}里^り此^この^川川^{がわ}口^{ぐち}
 斜^{しゃ}里^り浦^{うら}也^{これ}是^この^西西^{にし}の^平平^{へい}地^ち

少^すて^遠遠^{えん}笛^{ふえ}葉^は深^{こほ}き^此此^この^浦浦^{うら}也^こ
 ち^深深^{こほ}ふ^水水^{みづ}の^湖湖^{うみ}也^其其^{その}水^{すい}源^{げん}の^北北^{きた}
 釧^く路^ろ地^ちの^界界^かり^崎崎^{さき}つ^有有^あ来^ら
 牛^う此^こを^さよ^らり^西西^{にし}乃^の網^{あみ}走^し乃^の
 港^{みなと}り^色色^{いろ}く^網網^{あみ}を^湖湖^{うみ}此^この^水水^{みづ}
 よ^らの^程程^{ほど}を^く釧^く路^ろの^北北^{きた}よ^ら

數十の川、集りて流して海に
 界を越て、生ずる。網走河
 の河口より、海岸より突出
 一。其さきこの方野捕崎、崎
 より山脈又接乎之、南へ流して
 釧路とて、界より西へ南へ

折て、曲く、あるは乃界を分ち
 又折て、十勝の國とて、國界
 是より山脈とて、高くと、石狩
 國や地を隣る。あたかも、
 益高くと、千渡解牛
 や、ほんで、せう。遂に、天塩と

界さかい一ひて。一ひや一ひつとこ鴨鴨
 居い尻しり尚おほも連つる山脈さんみゃくの乾かんり
 延のびし尾をの末すえを天塩てんしんと界さかい
 の海岸かいがんにえきこまなひ乃
 かの方かた納紗布のつーやふ崎さき少終せうしゆ海
 たり野捕のりの崎さきを打越うちこえ

西しも野捕のりの池いけや其そのぬの方かた
 常とこ呂川ろがわあるふ一乃ひと大河たがわありて
 其そのの川源がわも十勝地じゆつちに界さかいの
 山脈さんみゃくより来るき川がわより西しを
 遠とほ隔ふちの湖うみ廣ひろく海水うみづと見みら
 うふ土つちを隔ふちつのみ紋別郡もんべつぐん

地^ちん開^{ひら}き。勇^{ゆう}別^{べつ}川^{がわ}や志^しよと
の川^{がわ}西^{にし}水^{みづ}向^{むか}く海岸^{かいがん}を^をり多^{おほ}
む川^{がわ}といふ^{いふ}。架^かく。み^みよ^よ落^{おち}て
入^いる水^{みづ}乃^の海^{うみ}。枝^え幸^き郡^{ぐん}の鴨^鴨居^ゐ
崎^{さき}也^{なり}。更^{さら}り^り過^{すま}き行^ゆき
も年^{とし}別^{べつ}湖^こ水^{みづ}猿^{さる}拂^{はら}の湖^こ水^{みづ}也^{なり}

空^{そら}ち平^{へい}地^ち少^{すく}く。乾^{かわ}乃^の端^{はた}を
宗^{そう}谷^こ郡^{ぐん}是^こを極^{ごく}端^{はた}の岬^{さき}也^{なり}
地^ち北^{きた}輝^き太^たと一^{いつ}水^{すい}也^{なり}。海^{うみ}を隔^へ
つらむ^{つらむ}の^の宗^{そう}谷^こを
廻^{まわ}り満^{まん}潮^{しほ}浦^{うら}海^{うみ}灣^{わん}ひん^{ひん}と
平^{へい}原^{げん}乃^の西^{にし}も朱^{しゆ}文^{ぶん}の湖^こ也^{なり}

細紗布崎 又北西
またなきく 沖の方 禮文郡
また沖の 利尻郡
や海より 崎つ二つ 嶋周廻者
十四五里 是をき 日の本
かゝる一 國內乃 人口を三

千あまのりえのりく
第六番を 膳振の 玉後志
物やおお 多し。南を 渡島小
地と接し 細く長く 折磬石
の形を延 其後西
うけてお の方 取巻く 園を

後志を。石狩國に一つあり。
前を東南海を受や。渡
名部の國を古くして。中ノ海
灣に。廣く内地を山を
川を。隣り石狩後志の海
へ。入る川の。其の水源を

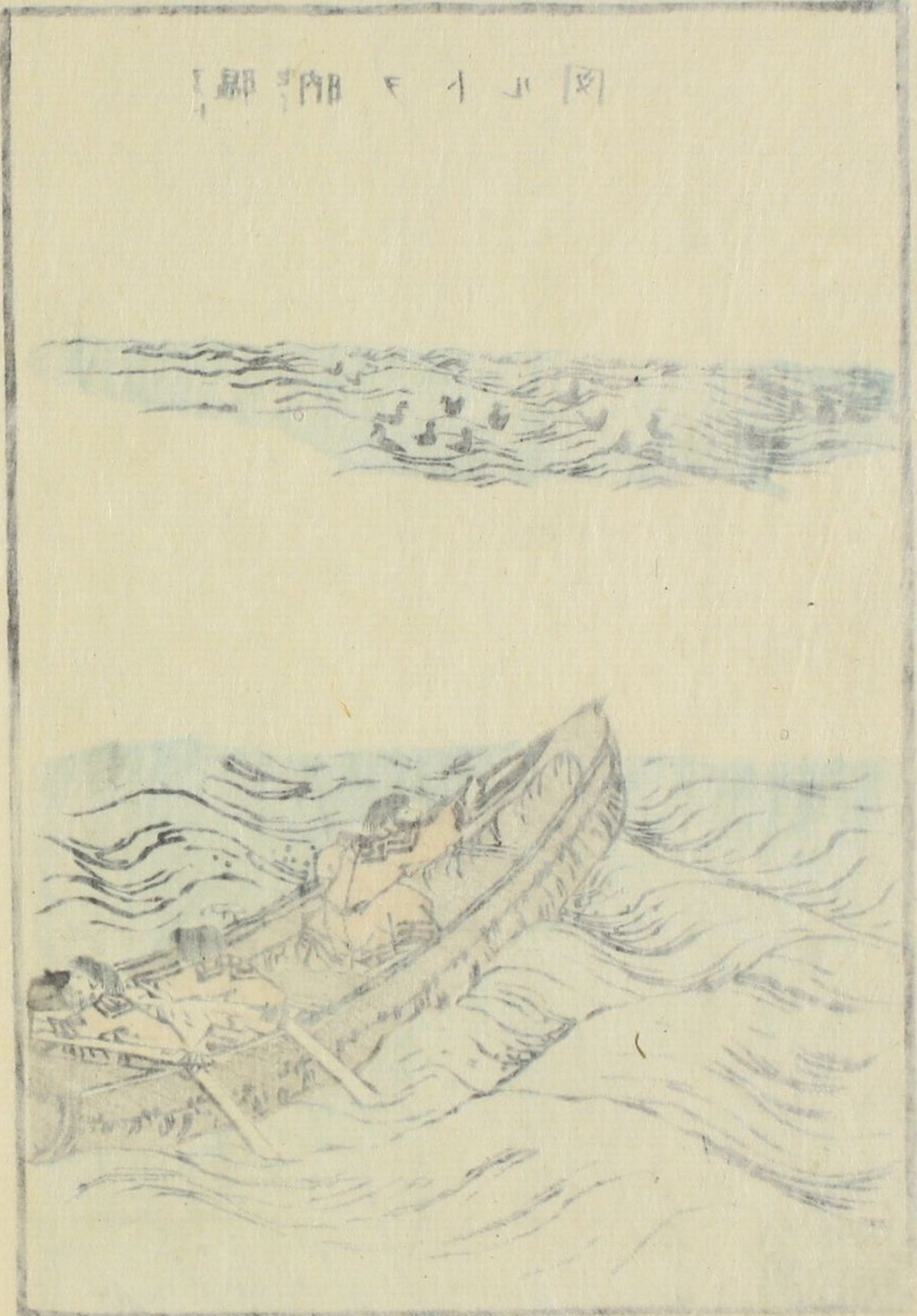
大抵は。土地に。あるを多
く。其ま。二國は。湯中
て。平原湖水も。大抵は。
後志。渡名部と。由玉。三國
界の。ゆるゆるの。岳乃。川水也
うらふ。川此邊。山越郡。少く。

平原廣き海岸のほとり
 口を少く過ぎりて程
 なるを也まん魚膾膾
 場川口を殊更人あはる
 其水源を蟹寒岳より
 南へ又別り流る川は

幅内ヲトル



圖 小 舟 行 船 郡



利 子 川 能 川 上 持 在 一 也
 ま ん ぶ り 後 志 の 壽 壽 津 津
 通 ふ 山 岳 を 解 舟 舟 舟
 水 の 方 里 和 内 の 山 越 舟 舟
 甜 瓜 能 名 物 麻 其 玉 也 舟 舟
 花 咲 く 溪 孫 郎 也 江 舟 舟

日本書紀卷四

風粟の来うたさいの山嶮を
 越過さく。下をりて建内
 の川是を志し此家こそ
 是より出んを舟あり陸
 地をりて路しつる舟を
 所謂しゆふき川こそ水乃

砂濱に舟をりたる賤蒨
 や慢内禮文の峠より落く
 流るる川に舟あり。峠を濱手
 乃大難所風系奇絶亦水
 其昆保後万羊蹄をんぬ
 尻裁たる山を脊みして

南より海濱程をさく白砂
まの山濱はぐき波の河あり
そ渡島地は内浦岳や惠
散山及方羊蹄山の東
後志國とけは函界尻別川の
水源は能登布蔓はさる所

峠を下りて成りけり河振
別川の川東有珠と山水
景ありて愛知港の北の方
嶺抜く黒烟を吐き出さる山
岳や岳は少くも白沼の
落石の家隈は岳より落ち

猿列川を越せしむる平地
まろ。室蘭岳を左におく海
岸づたひ南向行なり。室
蘭にまきこえしと入るる湾
の阿多たみそえともも此
岬突出し渡り能く内

浦乃岳と互なりお對し。膽
振の海の内やなる。後より
海の外海より風浪甚しく
濱廣く中を流る。横列
川は此源より阿蘇山岳に
ふる。魚つ岳より此の東

黃の温泉水噴出。岳乃其の
志。き。う。川。流。を。都。て。平
地。て。田。畑。ん。多。く。地。も。再
也。己。午。の。方。不。海。を。あ。ま。り
為。業。候。温。和。り。地。味。も。良。く。
妙。也。思。い。ん。方。地。を。あ。ま。り。白

老。郡。を。白。老。川。其。水。上。の
察。帳。其。岳。の。東。に。白。老。岳。猿
別。川。其。水。源。と。互。り。向。背
お。摺。ま。り。川。其。東。を。旭。の。宮。越
え。く。向。る。蛇。作。川。其。人。を
流。る。垂。舞。の。川。の。水。源

垂たかとなみ岳たけ垂たかとなみ岳たけのの小このの也なり
 察さつ慢ぼん自じ之の東ひがし地ぢるる内うち地ぢ乃なり
 一いち郡ぐん千ち歲とせとと之の山やまの中なか有ある
 平たいのの地ぢ媿ま津つ、ま藏ざう津つのの南みなみ湖こ有ある
 川かわととあありりたた克く滿まん、ま媿ま津つ川がわ
 小こ集あつりりままととくく石いし狩かりふふ、あ流ながせせ入いるる。

この地ぢ南みなみふふ引ひ続つきき、う海うみををままふふ
 出いででくく勇ゆう拵おつやや南みなみふふ一いちのの壑おん也なり
 地ぢ半はん馬ま澤ざい、ち穀こく実じつのの南みなみ海うみふふ
 をを解とのの漁り地ぢ也なり。吾あ妻づまとと六む
 川かわ乃なり二ふた川がわ、い石いし狩かり界がいよりより東ありり東ありり
 里り、あ南みなみ岸がしままととくく、い山やま海うみととくく、い

川カハの東ヒガシあり。立たち海うみぶ山やまは日ひ
高たかは能よ界かかたなる。さして國中くにちうに
人ひと口ぐちを三千五百さんせんごひゃく余人よにん今いまそ
土地とちを渡わたる海うみを隣となりしと
閑ひらけと殊ことふ毒どくあり。
背せい七日ひつにちあり。正せい角かくの三さん角かく形かたち

乃すなは國くに中ちゆう一いつて。北きたを東ひがしと西せい南なん
海うみを東ひがしと南なんと陸りく奥おく北きた
郡ぐんや海うみを隔へてお對たいし西せい
小こ面めんの垂たり邊へを膽に振ぢの國くにと
山やま界がい北きたへ向むかつる頂いただきを石いし橋はし
州しゅうの夕ゆふ張はり乃すなは山やま北きた陸りくて東ひがし

北斜邊より十勝と分界し
 肉地をさすべし山川を其
 水脈を山脈もみか順序
 よりくおみかひ膽振れるかよ
 每行し。基邊よりあたる海
 岸より。垂線と方なり涯を八

る界を八く舟一り猿吉川
 ち名持た夕張界より来る
 この川口の阿たりまお此
 開闢最初の地次り小川に
 板志をく板別川の川口を
 砂流に港を築きを築り

昆布ヲ取ル図



大河をむほく川。控の次家
るを志むひちり川。昆布
名所之石。郡ふみや
川浦の郡。浦りやこの
川。水。源。十。勝。界。此。野
居岳。の。た。さ。の。け。り。ほ。ろ

のけり。慢別川の東なる様
 似郡也。慢名は地面所なり
 細くあり。川の長も縮まりて
 遂に止まる。禮尚峯三里
 許を海中へ突出したる。
 出崎あり。是を南の大岬。

四ノ川ニ舟ト亦ト



廻く東に鑿田奴月十緒の
 國と此國界茲より沼見乃
 峠とそ険隘終壁土蟻附解
 歩やうふち岳の山陰ま
 つの少毛高き大峠おろ
 前ほよそ風俗もはるかに

遠より愛ると我さるはそ
 昔も峠より手前を白
 柳夷といひ東を奥に柳夷
 やつふ夷も眉毛も生る連
 たり。全身の毛さく緻密か
 ますさる名およそ禮裳の

日本書紀卷之四十五

社刺友館小義經社元候
平和地味あつく山中人金の
坑り富み海陸ともえり
産物ほく持た人日三三
千余
身八十倍も羨於の方面と

左より東南り海を交りた
る國小して西も日島も
山界乾の方を石村も東
も少人創路も西も北も六
山高く土田井等
平原渺茫野地廣く中も

日本國言と天竺

大川^{たいせん}克^く漕^{そう}。山^{やま}より出^いでて
 海^{うみ}へ入^いる。山^{やま}の^な名^なある^るは^ら日^ひ
 高地^{たかち}と界^{さかい}り。札^{さつ}内^{ない}竿^{さん}呂^ろ岳^{たけ}
 石^{いし}精^{せい}少^{しょう}見^みの^な界^{さかい}り。少^{しょう}き^きや^やり
 嶺^{りゅう}の^な十^{じゅう}勝^{しょう}岳^{たけ}。十^{じゅう}勝^{しょう}岳^{たけ}は^らお
 首^{くび}ら^ら末^{すえ}る^る川^{がは}を^ら少^{しょう}海^{かい}乃^の中^{ちゆう}

乃^の五^ご大^{だい}河^が中^{ちゆう}の^な身^み三^{さん}番^{ばん}是^こを
 十^{じゅう}勝^{しょう}岳^{たけ}の^な十^{じゅう}勝^{しょう}川^{がは}水^{みづ}源^{げん}は^らお
 五^ご十^{じゅう}余^よ里^り石^{いし}狩^う河^がを^ら向^{むか}骨^{こつ}
 一^{いち}。落^{おち}込^こむ^む支^し別^{べつ}の^な川^{がは}を^ら
 千^{せん}枝^し岳^{たけ}の^な采^{さい}乃^の木^き枝^{えだ}を^ら分^{わか}
 てる^るより^りえ^え尚^{なほ}志^しを^ら下^{くだ}い

川口より少く。乳房の乳を
出さざる。さきを十條の
少く少く乳汁といふ
しふこ持持能右なる
を河つたふたをさるる
ち本川なる。常緑川也

千代節也。やうやうもさう
冬みよて度湖とあり海
へ入る。屋のふね河の南に
方。唐尾も南地乃一都會。
海岸なる。好むを。持の人
早も人全國を併せく千百

七十餘。

中九釧路を小海の古來
巨臂手と唱へ來し國中
あまきこも風俗を殊うた
志く土地もよく名所勝
京教しきこと西より十餘ふ

南海東を根玉と地を接
し水を北へ入る山界水見
小落る網走の川此水と蔓
延し北に氷源より突瓦と
驛列したる高山を男阿
字女阿寒と名峰此塔奇

ある北よりくんと屋の東
小増宇西別岳女阿寒岳
乃東水阿寒の湖水ま
よく阿寒山に水よを男
阿寒岳乃東水久摩
の湖底も又よ是を名小

おふ水海の弟四の川に久摩
河に水源よりて北の下
やろ路の湖水を越過す
阿寒や合を南海ふ底
心口より釧路郡久摩の
港ふきをそ増宇岳の

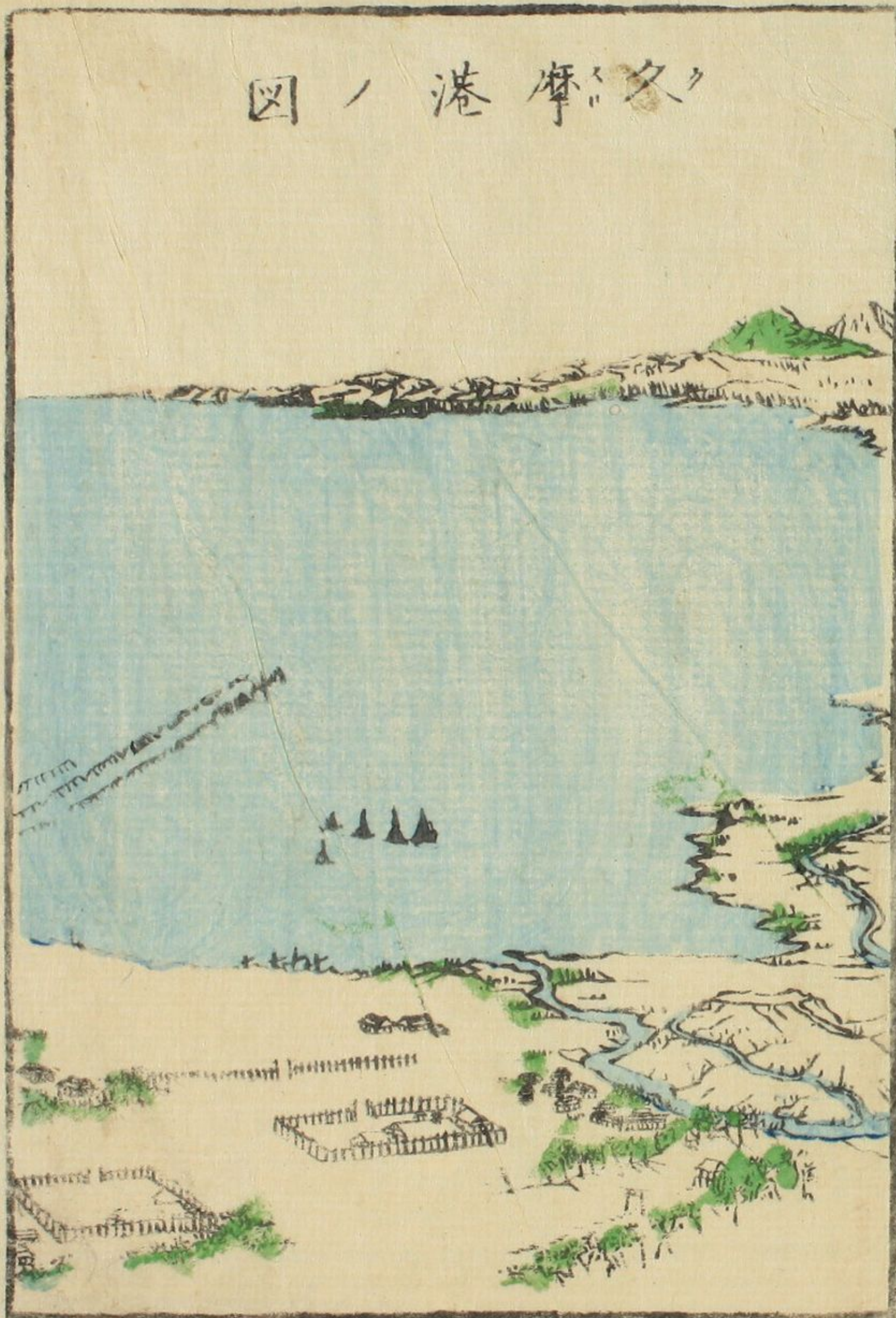
林^ふ廉^{れん}より増^ますの^の所^{ところ}ぬ^ぬ口^{ぐち}に^に。
 見^みえぬ^ぬえ^え不^ふ思^し議^ぎ其^{その}周^{まわ}圍^り。
 取^{とり}ま^まく^く山^{やま}に^に東^{ひがし}より^{より}根^ね室^{むろ}。
 了^{おつ}落^おる^る西^{にし}別^{べつ}少^{すく}標^{ひょう}津^つに^に。
 河^かの^の水^{みづ}上^{うへ}の^の川^{がは}と^とあ^あまた^{また}充^み。
 満^みま^まさ^さく^く是^{こゝ}の^の山^{やま}と^と。

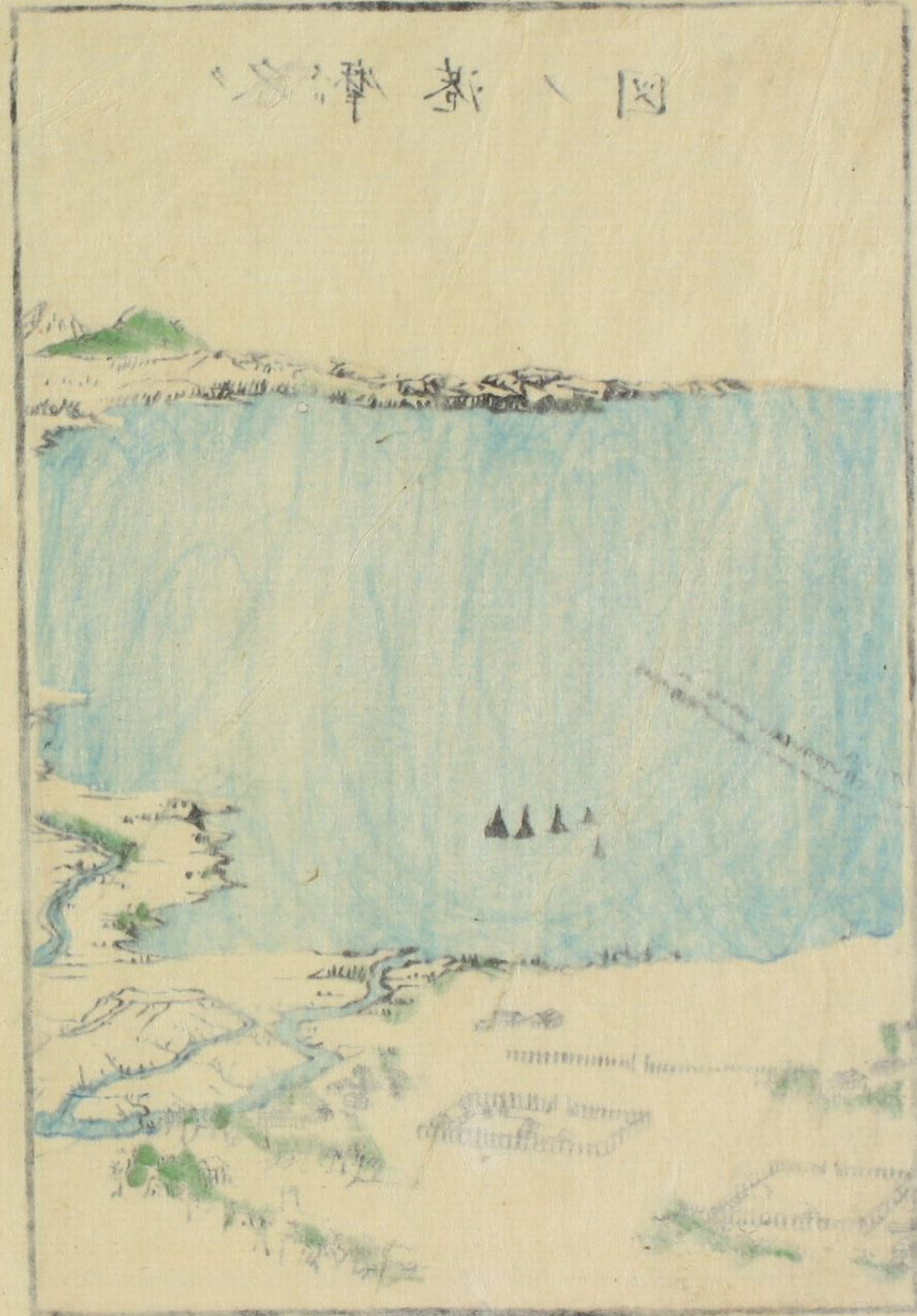
又^{また}数^{かず}に^に湖^{うみ}の^の阿^あ方^{かた}より^{より}流^{なが}。
 あり^{あり}温^{ぬる}泉^{いづみ}あり^{あり}洞^{ほら}穴^{あな}火^か坑^か。
 其^{その}外^{ほか}の^の風^{かぜ}柔^な怪^{あや}しく^{しく}奇^{あま}しく^{しく}。
 一^{ひと}々^つ筆^{ふで}少^{すく}ん^ん言^{こと}あ^あん^ん述^つ。
 可^かた^た一^{ひと}山^{やま}より^{より}南^{みなみ}より^{より}一^{ひと}面^{めん}も^も。
 南^{みなみ}を^を受^うく^く又^{また}南^{みなみ}を^を受^うく^く温^{ぬる}暖^{あたたか}の^の打^う舟^{ふね}。

山^{やま}の^の阿^あ方^{かた}より^{より}流^{なが}。
 五十一

きたる肥沃の地殊る久
 摩能川の西平原荒山
 えなく久摩港の鰐魚
 男阿寒女阿毛乃千島
 を次りせあふ西南
 白糖郡の岬より十勝の

久摩港ノ図





新津の図

國^{くに}をうらほしく。幾重の山^{やま}
 の糶糊^{もち}や。盡^つき少^{すく}くや
 其^{その}尖^{さき}も。日^ひ高^{たか}の襟裳^{えりも}の
 岬^{さき}なるま。既^{すで}共^{ども}も。海^{うみ}水^{みづ}濁^{にご}る。と
 天^{あま}を浸^{ひた}せる。大^{おほ}平^{ひら}海^{うみ}。宮^{みや}ふ
 比^ひる。以^も方^{かた}も。絶^た系^{けい}あり。港^{みなと}の

東を望み磯より内を石炭
の面を奇名怪敷いし多
橋株岩を始やせん海
トすげ引續き夫より海
岸八重の海灣廣き厚
岸よりゆるゆる磯しき
碇泊

塙八江にゆりし牡蠣島や
満酌牡蠣より成る如く
さきより飢饉の年なるは
餓死を免る民の命永世
にそそり我をなき八江の沖
も大軍を回廣を廻り懐

戸浦是より地方細くあり。
根室の國より此堺より一
國都ては人口を一子五百
余人あり。

第十番より根室の国より
つけ細長く東を都と

海を交りて千島と漸く
一水を隔てて東西お望む。
西を釧路と小見と小隣
とて小見の家あり山と谷
其の外も地所む好平原谷
地ありて南と小乃地の端と。

正室の中まごの二室ふたむろあり。実出まこと
たる岬さかと持もち南みなみる納紗布のりやぶ
中なかたるるる象ぞうの鼻はなみま
似にたる野付郡のつけぐんの岬さか少すく
水みづと持もち見みの由ゆ界か知床崎しじょうさきの
崎さきと知し進しん納紗布のりやぶ崎さきの系けい

みまみま十余じゆの嶋しまと列りやく
持もち孤こ妻つまとくくと大たいなるる
即すなはち媿丹島くわいたんじま小こて根室郡ねむろぐん
の内うちとくくと松室郡まつむろぐんを
野付のつけと比ひ間まと根室ねむろ乃な大たい
海うみ湾わん湾わんの南みなみ北きたを南みなみ過か

りそ根室の港好息し。
北は西の方海岸からを
ねふさうきんあゆ水さう
きん湖水の水よりを削路の
園より迂回して谷地芦
原を流すを尋るふさうきん

魚川の河水あり北は水の
方西別川とては湾中へ注ぐ
水那野舟の出崎を越過す
海を舟を通り標津川標津
のふさうきん梨郡山と川の
数七つ之をさうきん梨の七つ山

日本書紀

茅梨の七ヶ川とつふ枝え
 此のくふ 路程大
 概二百余里陸路の続れ
 まての國枝の人口も二百
 余
 才ナアそ千島とく大ふ

報卡の臨乃國根室の國は
 東より且寅へのけさ直ふ
 順列したる枝は出入即ち
 魯西亞此のむさふの西洋人
 の今ん尚クリル諸島と稱ふ
 るを。 我の千島の了ふ

此其根室少近き第一純
 嶺も其後郡少く周囲百
 里小過ねとん名山勝地
 多の妙少く大赤山よりそ
 茶々登るも四里余の絶
 頂より湖ありて其水氷

西より東へかき流つ東も
 大河西も流せり殊一き
 神山北西少泊の港あり東
 の方よりあつてもあまこる
 擇捉つれ渡口せき山の林
 あり海の中より温泉の沸

騰とくまゝるの奇き絶ぜつあり。七里ちり隔へ
 擇たく提ていも三島さんしやう四郡しよん乃長なりちやう
 大島だいしやう山さんも阿あ也阿あもさ
 岳たけちまつふ岳たけ也もふ岳たけ
 ささく湖うみもやさし湖うみも
 魚類ぎよるい影かげしし鯨くじらも海面うみ一

里余りよえん手捕てとらり左ひだりなるはほど
 充満ちゆうまんく鯨くじらも帯おびり游あそま
 おまそのほら外そと體たい也あふらそのほらた
 綸りんを投なぎし一餅ひともち少すくく八九
 尾びあまそのつぎ釣つりるもそのつぎ一ひと次つぎ
 左ひだりなるもささく湖うみも

ちと小嶋敷コトノ一ツギ身ミをミみみふ
 千名チナ地チ内ウチをミ持ミの
 人ヒト口クチをミ全ゼン嶋トウをミ保ホをミるル
 何ナニとミ持ミあアりリやヤ海ウミ

暹シム胸コウノノ図ズ



瓜生三寅著

身三夫區三小區
畫可圖者地

明治五年壬申十月新雕

東京芝大神宮前

名山閣

和泉屋吉兵衛

